

学位論文の要旨 (論文の内容の要旨)
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

氏 名 廖 琳
Name

Seal

学 位 論 文
Dissertation

論 文 題 目
Dissertation Title

中国語を母語とする日本語学習者における「テ形」の誤用に関する研究
ー動詞を中心にー

本論文は、『YUK タグ付き中国語母語話者の日本語学習者作文コーパス』Ver. 10 (以下、『YUK 作文コーパス』) から校閲者が誤用と判断した例を対象に、中国語を母語とする日本語学習者 (以下、「学習者」) が産出する動詞の「テ形」の誤用実態を論じたものである。動詞の「テ形」にどのような誤用パターンがあるのか、その誤用パターンにどのような傾向が認められるのか、そして誤用の発生要因が何であるのかという3つの課題を論じ、学習者が「テ」に持っている日本語母語話者とは異なる独自の捉え方を明らかにしている。

本論文は、十章で構成されている。

第一章は序論であり、本研究の目的、研究意義、研究資料、研究方法、本研究で用いる用語を説明している。

第二章は、動詞の「テ形」に関わる先行研究について述べている。「テ形」の活用形、「テ形」の統語的機能の分類、「テ」と「中止形」及び他の接続助詞との使い分け、「テ形」の誤用に関する先行研究を整理し、先行研究の問題点を指摘したうえで、本研究の位置付けを述べている。

第三章は、『YUK 作文コーパス』から抽出した動詞の「テ形」の誤用実態を整理し、第四章以下の考察対象を明確にしている。形式上の誤用として「活用形の誤用」、統語上の誤用として「述語形成機能のテ形」と「接続機能のテ形」が考察対象であること、その際、「述語形成機能のテ形」には不使用と過剰使用、「接続機能のテ形」には不使用、過剰使用、混用といった誤用類型があることを述べている。

第四章は、「活用の誤用」を分析し、誤用パターンの傾向及びその発生要因を論じている。誤用パターンは、①日本語と中国語の音声上の違いに起因する誤用 (「促音の挿入」、「有声無声の混用」、「母音の長短の混用」)、②変形時の基準が「辞書形」か「マス形」なのかによる誤用 (「一段動詞との混用」と「マス形との混用」)、③乗り換えによる誤用 (「く」で終わる五段動詞と「行く」との混用) という3種類に分類される。その際、①については「促音の挿入」が顕著であり、一段動詞、サ変動詞、カ変動詞に集中して認められることを明らかにしている。また、②については動詞の変形は「テ形」より「辞書形」に基づき作るほうが学習上有益であるが、この点が欠けている学習者の存在を示唆している。

第五章は、「述語形成機能のテ形」における不使用と過剰使用を分析し、誤用パターンの傾向及びその発生要因を論じている。「述語形成機能のテ形」は動詞 (V1) と動詞 (V2) の間に発生している誤用であり、誤用類型として不使用と過剰使用がある。不使用には、V1 が活用、V2 が意味関係を基準に「文法的アスペクトにおけるテ」、「受益におけるテ」、「V1 テ V2 におけるテ」という3種類の誤用パターンがある。これらにはV1 が五段動詞より一段動詞のときに起きやすいという共通の傾向があり、その要因として、「テ形」への変形の複雑さ、「マス形」の変形規則の過剰般化が考えられる。過剰使用は、「統語的複合動詞におけるテ」にだけ現れ、その際、後項動詞は「時間の相」を表す「始める」、「続ける」、「終わる」に限られる。前項動詞と後項動詞が表す2事態を別の場面として捉え、その2場面を「テ」で繋げている。

第六章から第九章は節と節の間に発生している「テ」に関する誤用を論じている。第六章は、「接続機能のテ形」における不使用（「中止形」の使用）と過剰使用（「テ形」の使用）を分析し、誤用パターンの傾向及びその発生要因を論じている。不使用より過剰使用のほうが起こりやすい。文体上の傾向として、不使用と過剰使用を問わず硬い文章に集中しており、学習者は文体を配慮し「テ形」を使用していないときにも校閲者は前後の繋がりから「テ形」に修正し、一方で学習者が「テ形」を使用しているときに校閲者は前後の繋がりから「中止形」に修正している。形式上の傾向として、過剰使用と不使用を問わず、読点の「、」を使用した誤用例が多くある。過剰使用の中で「テ形+、」が多く現れるのは学習者が読点の前後に区切りがあるという意識を持ち、その両者を繋げるために「テ形」を用いているからである。

第七章は、「テ」と理由の接続助詞（「ノデ、カラ、タメニ」）との混用を考察し、誤用傾向及びその発生要因を論じている。混用の誤用パターンは「*テ→ノデ」、「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」に顕著である。「*テ→ノデ」は、学習者が「テ」に因果関係の必然性が薄い「契機的因果関係」を読み取ることができない、あるいは、因果関係の読みを意味の繋がり委ねる場合に学習者が「テ」を用いている。「*ノデ→テ」は、学習者が「ノデ」によって自然に感情が導き出される「必然的因果関係」も表すことができると見なしていること、「*カラ→テ」は学習者が日本語母語話者であれば前後文に「時間的継起性」を読み取るときにも「カラ」を使用している。

第八章は、「テ」と逆接の接続助詞（「ガ」）との混用を分析し、その誤用傾向及び発生要因を論じている。「*テ→ガ」の混用パターンには意味用法上の誤用である「前置き」、「逆接」、「対比」と「譲歩」があるが、その過半数は「前置き」が占めている。その理由として、前置きがないと唐突な感じを与える日本語とは異なり、中国語では前置きが無くても相手を不快にさせないという言語間の相違が考えられる。この理由により、学習者は、前件を「前置き」と捉えず、しかも前後件の事態を個々に独立した場面と捉え、「テ」でその前後を繋げている。「*ガ→テ」の混用パターンには「原因・理由」、「ガの二重使用」、「継起」、「対比」があるが、「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」には「前置き」と類似点があり、「ガ」節で話題が導入され、後件で前件の話題の続きが述べられる。その際「すみませんが」などの定型表現に影響され、前件は話題導入部として「前置き」と見なされ「ガ」が使用され、他方、後件は中心部と見なされ、前後件は1つのまとまりとして捉えられている。

第九章は、「テ」と条件の接続助詞（「ト」）との混用を分析し、その誤用傾向及び発生要因を論じている。「*テ→ト」の混用パターンには、「習慣」、「発現」、「きっかけ」、「仮定」と「発見」があるが、その混用全体の6割以上を「発見」が占める。その際、最も多いパターンは、前後の主語が異主語、前件述語が知覚動詞、そして後件述語が認識、存在、状態を表す述語である。「発見」が最も多い理由としては、学習者が異主語による前後件の2事態を時間に沿って起こる別の場面として捉え、「テ」で繋げている可能性が考えられる。「*ト→テ」の混用のパターンは、「因果」、「1つの場面における一連動作の描写」、「条件表現の二重使用」、「2つの動作の連続のみ可」があるが、その際、「因果」のみが意味用法に関する誤用であり、混用全体の半分を超える。最も多い誤用パターンは、前後件の主語がいずれも一人称で、前件に知覚動詞、後件に感情表現が来るときである。「ト」を使用している理由は、一人称による前件の知覚と後件の感情の発生とが同時に起きる近接継起関係として捉えられ、「発見」の「ト」が使われている可能性がある。その際、中国語で近接継起関係を表す「就」を「ト」に対応させるといった点に関わっている可能性がある。

第十章は結論であり、第五章から第九章の分析に従い、動詞の「テ形」における学習者独自の捉え方を、5点にまとめている。①動詞と動詞を繋げる際に「テ」を使用せず、複合動詞化を起こす。②節と節を繋げる際に「テ」を過剰に使用する。その際、形式上の傾向として、読点の「、」を使用した例が多くを占める。③前後件が「契機的因果関係」で繋がれ、後件にモダリティあるいは意志的動詞が現れる場合には「テ」を使用し、前後件が「必然的因果関係」あるいは「時間的継起関係」で繋がれる場合には「ノデ」または「カラ」を使用する。④学習者は前置き表現に関する知識や認知度が不足している場合にはその前後を「テ」で繋げ、他方、「前置き」の意識を持っている場合には話題導入部を前置きと見なし、「ガ」を使用してしまう。⑤前件に知覚動詞が現れる場合である。学習者は前件の人が知覚した結果、後件に前件と

異なる人が為した認識、存在などといった発見を表す状態性述語が来る場合に「テ」を使用し、他方、前件で自らが知覚した結果が後件で自らの心が表す感情の表出の理由となる場合に「ト」を使用する。

学習者が誤用を起こすのは日本語母語話者と捉え方が違うからである。「*テ→Y」において、学習者が「テ」を使用する根本的な理由は、「テ」は意味が多岐に渡っており、その分だけ学習者にとって使い勝手が良く、簡単な接続方法であるという点に尽きる。他方で、学習者が「テ」の前と後ろの事態を1場面として捉えているのか、それとも2場面として捉えているのかといった点も関わっている。学習者は前後件の事態に関連性を感じず、単に時間的な流れに沿って展開する別々の2場面と見て、「テ」を用い、その2場面を結んでいると考えられる。他方、「*X→テ」は、学習者にとっては相応しい接続助詞が誤用と判断されたものであるが、前後件の事態に関連性を感じ、その前後を1つのまとまりとして1場面の中で捉えているため、学習者は最も使いやすい「テ」ではなく、それ以外の接続助詞を使用していると考えられる。こうした場面性の違いは、学習者にとって「テ」は写真を1枚1枚順に眺めるように非連続なものを結ぶためのものであり、日本語母語話者にとって「テ」は映画を見るように連続的な繋がりを表すためのものとなりうる。

備考 論文の要旨はA4判用紙を使用し、4,000字以内とする。ただし、英文の場合は1,500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 words.